

言語ゲーム

堀内 守

あのことばは消えかかっている。

「二百十日」ということば。節分からかぞえて「二百十日」にあたる日。大風が吹き、大雨が襲ってくる。以前は「颯風」と書いた。いまでは「台風」と書く。この字を見つめていると、身体がむずがゆくなるような気がしてならない。

少々記憶をたぐりよせてみると、「颯風」という字になれる前には「嵐」という言い方が子どもの世界で流通していたようである。「あらし」の音は「荒らし」にも通ずるから、子ども心に「荒ら荒らしい」状態をそこから感じていたのかもしれない。

「颯風」は上級生たちの用語であった。幼ない私たち

が「嵐」ということばを使っていると、彼らは私たちが小馬鹿にするような口調でからかった。私たちも背のびをしなければならぬ。背のびをして、そっと「颯風」ということばを口にしてみた。半分は大きくなったような気分、半分は住みなれたところから住みなれぬ世界に引越した気分である。

何かをおぼえていくことは、このような背のび、ないし移住と似たしくみによるのかもしれない。

節分と二百十日の間には「八十八夜」がある。「二百十日」という表現に親しんでいたころには、節分と八十八夜と二百十日とは一連のつながりをもっていた。このうちで、節分はまことにテレクさい思い出につながっている。毎年、節分近くになると、作文を書かせられたからだ。

先生は「思った通り、感じた通りに書きなさい」と言ってくれたが、子ども心にはこの指示は抽象的すぎた。このことばに忠実であろうとすれば、子どもは文

章を書くことはできない。「いま文を書こう」として
いる。書くことができなくて困っている」というように
なってしまうのだから。

「八十八夜」は、なぜ「夜」がつくのかふしぎであ
った。しかし、「八十八夜」のイメージは軽快である。

例の「夏も近づく八十八夜」のメロディにつながる
からで、あの伴奏の「トン、トン」が身体を軽快にし
てくれる。子どものころはあの「トントン」が歌詞で
あるかのように思いちがいをしていた。

「二百十日」は断然ちがう。「颱風」の襲来は通常
の世界を根底からつきくずし、日中でも空は暗雲で暗
くなり、あたり全体がゴーという音でみだされてしま
う。身のまわりでは雨戸がガタガタ鳴り、バケツが大
風で翻弄され、樹木が根こそぎになり、枝も裂けてし
まう。「二百十日」はこわい。

この「こわさ」は、高所に登ったときのこわさと
も、暗闇にむけるこわさともちがっていた。「颱風」

という擬人化した魔物が世界をのし歩く。

この「こわさ」があつたおかげで、「まんじりとも
しないで」とか「野分」とか、その他もろもろのこと
ばの表にひそんでいるおどろおどろした意味あい伝
わってくるのかもしれない。

「まんじりともしなかった」という表現は、当時の少
年読み物に出ていた。「二百十日」が過ぎたあと、子
ども心にそれを使ってみたくってたまらなかった。

「きのうの晩はまんじりともしなかった」と遊び仲間
に告げたら、だれも感心してくれなかった。残念だっ
たから、年上の友だちに向かって同じことを言ってみ
た。相手は「ふん」と応じただけである。しかし、そ
の表情にはさまざまな意味あいこめられていたよう
に思う。

「まんじり」の意味をうまく伝えることはむずかしい
が、九月になると、このときの奇妙な背のびを思い出
す。

(名古屋大学)